

## 天正遣欧使節のベネツィア滞在与伊東マンショの肖像画

早稲田大学 教授 伊川健二

**天正遣欧使節のベネツィア滞在** 天正遣欧使節は1582年から1590年にかけてヨーロッパ、アフリカ、アジア各地を歴訪し、ローマでは2代の教皇と謁見した使節である。伊東マンショと千々石ミゲルを大使とし、原マルチノと中浦ジュリアンを副え、さらに引率者や従者を構成員としていた。マンショは大友宗麟（義鎮）の、ミゲルは有馬晴信と大村純忠の大使の任を帯びていた。彼らは、ローマ教皇への礼を修めることなどを主たる目的として派遣された。

使節一行がベネツィアを訪れたのは、ローマでの教皇謁見後の、1585年6月26日から7月6日である。ローマへの滞在中が2か月あまりに及んだこととは比べるべくもないが、その後のイタリア諸都市歴訪の多くが1～2泊であったことを想起するならば、比較的長期の滞在中とみなしてよい。彼らの滞在の背景には、ローマ教皇グレゴリオ13世およびベネツィア総督ニコロ=ダ=ポンテの意向があったようである。他方で、駐ローマ、ベネツィア共和国大使ロレンツォ=ブリウリは、彼らの厚遇への難色を表明した。

一行は概して歓待を受けた。すでに95歳になっていたといわれる総督との公式謁見は6月28日と7月4日の2度に及び、会場には総督の館（Palazzo Ducale）のコレジヨの間（Sala del Collegio）（図1）が当てられた。館は、現在ベネツィア観光の目玉であるサン=マルコ広場に面した立地であり、コレジヨの間も観光順路に組み込まれている。このほか、



図1 コレジヨの間（2018年9月1日撮影）

ムラーノ島のガラス加工や、兵器工場、造船所、祭の行列を見学するなど、盛りだくさんの日程で、ベネツィア滞在中を終える時には、原マルチノの

目には涙があったと伝えられている。

一行の肖像画を総督の館の大会議室に掲げる計画が発表されたのは、7月4日の総督謁見の席上でのことである。ダニエルロ=バルトリ編『イエズス会史』によれば、描画を依頼されたのは、ベネツィ



図2 伊東マンショ像（長崎歴史文化博物館蔵）

ア派の巨匠ヤコポ=ティントレットであった。「彼らの固有の服装（ne'loro proprii habiti）」を描き、彼らが何者であるかなどの注記を日伊両言語で添えることとなった。ところが、作業は延引され、マンショの肖像画のみは完成をみたものの、他の肖像は下絵のみにとどまったと伝えられている。

**伊東マンショの肖像画** ところで、伊東マンショを描いた肉筆画は、これまでも確認されている（図2など）。平成26年（2014）3月に新たなる肖像画（右頁）の発見が報じられた。イタリア・ミラノのトリブルツィオ財団が所有するコレクションのなかからの発見であった。X線調査の結果、この絵の左上にはもともと注記が施されていたことが確認され、同じ文が裏面に書き写されている。そこには「ドン=マンショ（D.Mansio）」はフランチェスコ王の大使であるなどと説明されている。「フランチェスコ王」は大友宗麟のキリスト教徒としての名前である。これらの点から、ドン=マンショ、すなわちこの肖像画の主は、伊東マンショだと理解される。

この伊東マンショ像と使節のベネツィア滞在中との関係は、さらにやや複雑な過程をたどることで浮き彫りとなる。肖像画の裏面には、「DGH393」とのコレクション番号が記されている。この番号から駐ローマ、スペイン大使ドン（D）=ガスパール（G）=デアール（H）が旧ティントレット工房から購入したことが判明する。先述のヤコポ=ティントレットも関わった工房である。それならば、記録に登場した彼の作品かといえば、事はそう単純ではない。記録ではマンショらは「固有の服装」、おそらくは和装と



写真提供…ユニフォトプレス

されているが、この肖像が洋装であることは一見して明らかである。作者もヤコポ=ティントレットではなく、その子であるドメニコ=ティントレットに比定されている。すなわち、この肖像画は、使節がベネツィア滞在中に制作が発表された作品そのものではないが、制作が依頼された工房に伝存した作品だということになる。やや複雑な話である。

伊東マンショは、当時20歳だったといわれている。1612年に没した際に43歳だとされる年齢から逆算すれば16歳前後だったとも考えられる。浅黒くみえる顔の色は、インドやアフリカを経た航海のなかでの日焼けが影響しているのかもしれない。ローマ教皇謁見の席上、彼の人柄は慈悲と感謝の愛に満ちていると讃えられた。

【社会科 中学生の歴史】 p.91 図 「⑤天正遣欧少年使節」では、上段右端の人物が伊東マンショとされる。